


英語教育中核教員育成研修

令和4年度  
授業改善  
プロジェクト  
報告書



アクション・リサーチによる  
高等学校英語授業での実践研究

## 目 次

英語教育中核教員育成研修とは	1
「教師が変わり、生徒が変わる授業」を目指して ―授業改善プロジェクトの概要―	3
<b>「聞くこと」に関わる指導</b>	
的確な内容理解を促すリスニング指導	5
<b>「読むこと」に関わる指導</b>	
能動的な読みを促すリーディング指導	9
深い理解につながる読みを旨としたリーディング指導	13
英文を「自分ごと」として読み進める力を養うリーディング指導	17
<b>「話すこと【やり取り】」に関わる指導</b>	
正しい語順と時制を用いてやり取りする力を伸ばすスピーキング指導	21
<b>「話すこと【発表】」に関わる指導</b>	
聞き手の理解を意識し自信をもって話せる力を育てるスピーキング指導	25
身近な事柄について分かりやすく伝えるスピーキング指導	29
<b>「書くこと」に関わる指導</b>	
読み手を意識した英文を書くためのライティング指導	33
英語学習初期段階のためのライティング指導	37
説得力があり読み手の興味を引く英文を書かせるための指導	41

\*それぞれの実践レポートの内容については、言語活動の呼称などに関し、厳密な用語の統一はしていません。



の今後の研究に資することです。

お読みになる際は、以下の本報告書作成・編集方針をご理解いただけるようお願いいたします。

#### 授業改善プロジェクト報告書作成・編集方針

1. 授業に参加している生徒の個性や尊厳を尊重し、生徒はみなそれぞれの可能性をもっているとの認識に立つ。
2. 学校や生徒の状況について、読者に参考となる情報を個人情報の保護に留意して記述する。
3. 実践報告については、理想論にとらわれず、現状認識に根ざした課題解決の軌跡を記述する。
4. 授業改善のプロセスやストーリーが読者に分かるように記述する。
5. データ処理や分析については、統計処理を含め言語教育研究で用いられる手法を積極的に取り入れ、授業改善の手立ての効果を記述する。

本研修の実施および本報告書の作成にあたっては、過去の文献や研究成果、私たち研修担当者自身がお世話になった諸先生方から多くの知見をいただいていることを申し添えます。

## ○ 授業改善プロジェクトの流れ

授業改善プロジェクトは次のような手順で進められます。

### 1. 自分の授業スタイルの振り返り

授業で行っている個々の活動の目的と効果、活動のつながりをあらためて考えることで、英語教師としての思いと実際の指導方法の整合性を確認します。これにより、自分の授業を客観的に分析するということを体験します。

### 2. 授業における課題の発見

現在担当している科目の一つについて、どのような課題・問題があるか、教師の思いと授業の実情にどのような食い違いがあるかなどを、思いつく限り挙げてみます。

(例) 英文読解に多くの時間を費やしてしまい、生徒に自己表現をあまりさせていない。

教科書英文の読解活動には取り組むが、初見の英文に対応できる読解力が育っていない。

### 3. 改善すべき課題の確定

上で挙げた課題のうち、改善可能で優先順位の高いものを一つまたは二つ選びます。

### 4. 生徒の現状把握

確定した課題に関連する生徒の学習態度や英語力・技能などを、質的・数量的に調査します。

(質的データの例) 生徒の英語学習に関するコメント、教師による学習観察記録

(数量的データの例) 標準テストの得点、推定語彙サイズ、発話語数

### 5. 改善目標の設定

授業改善の目的とゴールを、「リサーチ・クエスチョン」および「改善の目安(数値目標)」として明確に言語化します。

### 6. 目標達成のための手立ての決定

目標を達成するために、授業でどのような指導を行うかを決めます。その際、それぞれの指導事項や言語活動にどのような目的や効果があるのかを明らかにしておきます。

(例) プレリーディング活動を工夫すれば、興味や背景知識が活性化され、主体的に読解に取り組むようになるだろう。

### 7. 生徒の変化の検証と教師自身の振り返り

原則的に事前の現状把握で用いたものと同じ手法で、生徒の変化・向上を検証し、改善目標が達成されたかどうかを調べます。また同時に、この一連の取組を通して「生徒の見方」「授業のデザイン」「教材の扱い方」などについて、教師自身がどのように変化したかを省察します。

### 8. 報告

同様の課題を抱える教師仲間との情報交換、勤務校や地区での情報提供に役立てるために、レポートを作成します。ここで再度、今回の授業改善の内容・手法を振り返るとともに、今後の課題について考察します(研修最終日に英語による口頭発表も行います)。

## ○ “Teacher as a Researcher” の意識とスキル

「自分が教わったように教える」「目の前の教材をあるがままにこなす」「はやりの言語活動を切り貼りする」というやり方では、うまくいかないことがよくあります。教師の直観や伝統的なやり方にもよさはあるですが、生徒の質的・数量的ニーズを調べ、その客観的データに基づいて、生徒とゴールを共有しながら（変化をとまなう）意思決定をしていくという意識やスキルは、プロである教師の成長に不可欠であると考えます。この授業改善プロジェクトに取り組んだ先生方が、仲間を増やししながら、よりよい授業を追求するプロ集団をつくり上げていくことを期待しています。

## ○ 過去のテーマ分類

国際言語文化アカデミアにおける「英語教育アドヴァンスト研修」を含めた、過去の受講者が取り組んできた授業改善のテーマを分類すると、次の表のようになります。平成 26 年度までは、「動機づけ・学習意欲」やスキルを支える言語知識である「語彙・文法」もテーマとして挙がっていますが、平成 27 年度からは、『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標に基づいたスキルの習得を目指す授業実践の必要性を重視し、4 技能のいずれかをテーマ（＝授業のゴール）として選択することとしています。

	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
聞くこと	0	1	0	0	1	1	2	2	2	0
話すこと	2	1	2	7	9	4	7	3	7	4
読むこと	5	4	4	6	11	8	6	6	4	4
書くこと	4	4	*1 [ 3	*1 [ 3	4	2	0	4	2	1
動機づけ・学習意欲	6	3	1	5	—	—	—	—	—	—
語彙・文法	3	1	2	3	—	—	—	—	—	—
計	20	14	13	25	25	15	15	15	15	9

\*1：「技能統合型」

	R3	R4
聞くこと	4	1
読むこと	5	3
話すこと【やり取り】	8	2
話すこと【発表】	4	1
書くこと	3	3
計	24	10

## 的確な内容理解を促すリスニング指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス120名（男子63名、女子57名）の生徒である。例年、全体の9割近い生徒が4年制大学へ進学しており、4年制大学進学者のうち約6割の生徒が一般選抜を利用している。ほとんどの生徒が授業や課題に真面目に取り組むが、英語の習熟度には差が見られる。

### 解決すべき課題

リスニングへの関心は高く、指示されたタスクに真面目に取り組む意欲はあるが、受け身の姿勢が目立つ。また、概要や要点、話し手の意図を把握するという目的をもって英文を聞くことに慣れていない。学習方法を模索している生徒も目立つ。英文を聞いて概要や要点を的確に把握する力や、自ら学習する姿勢を養いたい。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

・第1回 アンケート（5月末実施：回答者数119）

1. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。（三つまで選択）

聞く力	読む力	書く力	話す力	単語や熟語	文法
77人(64.7%)	54人(45.4%)	44人(37.0%)	83人(69.7%)	36人(30.3%)	36人(30.3%)

2. 英語を聞く力はこれからの生活の中で必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
102人(85.7%)	17人(14.3%)	0人(0.0%)	0人(0.0%)

3. 英文を聞く時、概要を素早く理解することができますか。

かなりできている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
6人(5.0%)	56人(47.1%)	43人(36.1%)	14人(11.8%)

4. 英語の勉強について、困っていることやわからないこと、知りたいことがあれば書いてください。（自由記述）

- ・リスニングをどうすれば理解できるようになるのか
- ・リスニングで全然聞き取れない

- ・何を勉強したらいいのかわからない

#### <分析と考察>

英語を聞く力を伸ばしたい生徒が 64.7%いるのに加え、全員が英語を聞く力がこれからの生活に必要なと感じており、生徒のリスニングへの関心の高さが見て取れる。一方で自由記述の回答から、英語そのものやリスニングの学習方法に悩みを持つ生徒も多く、技術の伸長だけでなく、学習方法も併せて指導する必要があると感じた。

#### ・第1回 リスニングテスト（5月末実施：受験者数 118）

過去の英検準2級のリスニング問題を使って生徒のリスニング力を調べた。（問1～13は選択問題、問14～17は英文の概要を日本語で簡潔にまとめる問題）

##### 選択問題（13点満点）

平均点	標準偏差	6割（8点）以上
7.68	2.62	66人（55.9%）

##### 日本語による概要まとめ問題（4点満点）

0点	1点	2点	3点	4点	5割（2点）以上
52人(44.1%)	43人(36.4%)	17人(14.4%)	6人(5.1%)	0人(0.0%)	23人(19.5%)

#### <分析と考察>

選択問題では、この時点で半分以上の生徒が6割（英検の合格ライン）以上正解していた。しかし概要を日本語で答える問題では半分以上正解の生徒が20%未満と、必ずしも概要や要点を的確に聞き取れているわけではないことが分かった。

### リサーチ・クエスチョン

生徒が英文を聞いて、自力で概要や要点を的確に把握できるようになるにはどのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・英検準2級レベルの選択式リスニング問題（1点×13問）に6割（8点）以上正解する生徒が全体の6割以上になる。
  - ・英検準2級レベルのリスニングの概要をまとめる問題（日本語記述式、1点×4問）で5割（2点）以上を正解する生徒が全体の3割以上になる。

### 改善のための手立て

- 語彙に対する反応速度を上げる練習を行えば、話される英語を聞いた瞬間に理解できるようになるだろう。
  - ・帯活動としてフラッシュカードで単語学習をする際、単語を聞いた瞬間に意味を言わせる。また、正確な発音にも留意させる。



- 音韻変化に関する明示的な指導を行えば、英語が聞き取りやすくなるだろう。
  - ・リンキング、リダクション、フラッピング等英語特有の音の変化を明示的に解説する。
  - ・サイトトランスレーション、リードアンドルックアップ等の音読を通して正確な発音を身に付けさせる。
- リスニングを行う前に内容に関する予測をすれば、概要や要点がつかみやすくなるだろう。
  - ・プレリスニング活動として英文のテーマに関する質問をし、背景知識に関する情報を与える。
  - ・英検のリスニング問題を利用して、問題の選択肢から内容を予測した上で問題を解く練習を行う。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回 アンケート（11月末実施：回答者数 118）

1. 英文を聞く時、概要を素早く理解することができますか。

かなりできている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
9人(7.6%)	58人(49.2%)	45人(38.1%)	6人(5.1%)

2. この授業を通してリスニング力が上がったと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
23人(19.5%)	70人(59.3%)	22人(18.6%)	3人(2.5%)

#### <分析と考察>

「英文を聞く時に概要を素早く理解できる」と答えた生徒は、前回と比べると微増している。また、「リスニング力が上がった」と答えた生徒は全体の8割近くになり、授業内で行った活動に一定の効果はあったと考えられる。一方で、「リスニング力が上がったと思わない」と答えた生徒が2割程度いることから、継続的な指導、より効果的な指導が必要である。

・第2回 リスニングテスト（11月末実施：受験者数 119）

選択問題（13点満点）

平均点	標準偏差	6割（8点）以上
8.17	2.32	77人（64.7%）

日本語による概要まとめ問題（4点満点）

0点	1点	2点	3点	4点	5割（2点）以上
49人(41.2%)	37人(31.1%)	26人(21.8%)	3人(2.5%)	4人(3.4%)	33人(27.7%)

#### <分析と考察>

第2回リスニングテストでは、選択問題の平均点が7.68点から8.17点へ上がった。6割以上を取った生徒は全体の6割を超え、改善の目安に達した。また、個々の生徒の伸びについてt検定を行ったところ、有意差が認められた（ $p=0.00<0.05$ ）。一方概要まとめ問題においては、2点以上を取った生徒が33人（27.7%）と第1回に比べて8.2ポイント増加したものの、改善の目安の3割にはわず

かに届かず、 $t$ 検定においても有意差が認められなかった ( $p=0.12$ )。ただ、正解とは言えないが、断片的に内容を理解できていると思われる回答の数が第2回目には増えており、指導の効果を実感することができた。

## **教師の変化**

- ・授業の準備として、導入活動や発問により工夫をしようとする時間が増えた。
- ・理論に基づいて授業を作ろうと意識するようになった。
- ・結果が数字として表れることで生徒の変化を見て取れたので、自身のモチベーション向上につながった。

## **今後の課題（次の改善点など）**

教師の指示や支援があれば、英文を聞いて、ある程度の内容をつかめるようにはなったが、まだ自力で概要や要点を的確に聞き取る力が十分ついたらとは言えない。生徒が今後も力を伸ばしていくためには、自主的なトレーニングが不可欠であると感じている。自立した学習者として生徒を育てるためにも、今後はより効果的な学習方法の提示や家庭学習の支援なども行っていきたい。

## **まとめ・感想**

英語の授業の時間内だけで英語力を向上させるのは不可能に近いと感じている。今回は、英語特有の音韻の変化やリスニング問題を解く際のストラテジー等、今まで生徒があまり触れたことのない分野のトレーニングを行ったことで、生徒の聞く力に一定の改善が見られた。しかし、より高難易度の問題に取り組もうとすると、「音は聞き取れるのに内容が入ってこない」等の壁に直面するだろう。その時に生徒がその壁を越えられるかどうかは、今回生徒に示したトレーニングを自力で続けられるかどうかにかかっていると思う。生徒が自力で学習を継続するためには、教師が自信をもって活動のねらいや目標を生徒に提示し、共有することが重要だと感じた。今後も自信をもって生徒を指導していくために、知識や技術をさらに磨いていきたい。

## **授業改善にあたって参考にした資料等**

- 鈴木寿一・門田修平(編著). (2018). 『英語リスニング指導ハンドブック』大修館書店.
- 武井昭江(編著). (2002). 『英語リスニング論 聞く力と指導を科学する』河原社.
- 亙理陽一. 『共通テストを見据えたリスニングの指導方法: Before/While/After Listening のサブスキルの豊富化』 <https://www.chart.co.jp/subject/eigo/cnw/91/91-2.pdf>.

## 能動的な読みを促すリーディング指導

科目名	英語コミュニケーションⅠ	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス80名（男子37名、女子43名）の生徒である。英語学習への意欲は高く、授業の活動にも積極的に取り組んでいる。例年ほとんどの生徒が難関大学への進学を目指している。将来、留学や海外で働くことを希望している生徒もいる。

### 解決すべき課題

授業中、多くの生徒は未知語が出てきたときに読み進められていない様子である。様々なトピックの英文読解に自信をもって取り組む態度を育成し、的確に概要や要点を読み取る能力を身に付けさせる必要がある。教員側の課題としては、授業において初見の英文を読む機会を十分に与えられておらず、生徒が自分の力で読めるようになるための活動が十分ではないことがある。また、どのように英文を読み進めていくかということに焦点を当てた指導ができていない。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回英語の授業に関わるアンケート（4月実施：回答者数75）

1. あなたは英語の学習が好きですか、嫌いですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
26人 (34.7%)	29人 (38.7%)	18人 (24.0%)	2人 (2.7%)

2. 初見の英文を読む時、本文の概要を素早く理解することができますか。

かなりできている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
5人 (6.7%)	50人 (66.7%)	20人 (26.7%)	0人 (0.0%)

#### <分析と考察>

英語の学習が「好き」「どちらかといえば好き」と回答した生徒は全体の73.3%であった。生徒の要望に合った適切な指導をし、生徒が自身の伸びを感じることができれば、英語の学習に前向きに取り組む生徒をさらに増やすことができるはずだ。また、初見の英文を読む時、本文の概要を素早く理解することが「かなりできている」「まあまあできている」と回答した生徒が73.3%いたことから、多くの生徒が初見の英文を読む時に必要な注意を払いながら読んでいることが分かった。しかし、読

解における課題を複数選択式で回答させたところ、6割程度の生徒が「知らない単語が出てきた時に意味を推測して読み進める力」を選択したことから、語彙の知識を高めるための指導が必要であることが分かった。

・第1回英文読解テスト（5月実施：受験者数 77）

パラグラフの要点やパッセージの概要を読み取る力がどれくらい身に付いているかを調べるため、英検準2級の4B、2級の3Cの過去問を出題した。準2級は既存の要点問題4問と自作の概要問題1問、2級は既存の要点問題4問と既存の概要問題1問で、1問1点、各級計5点とした。

	0～1点	2点	3点	4点	5点
準2級4B	14人 (18.2%)	12人 (15.6%)	22人 (28.6%)	24人 (31.2%)	5人 (6.5%)
2級3C	26人 (33.8%)	22人 (28.6%)	19人 (24.7%)	5人 (6.5%)	5人 (6.5%)

<分析と考察>

4点以上の生徒が準2級で37.7%、2級で13.0%であり、多くの生徒が英文の概要や要点を的確に把握できていなかった。使用した英文のトピックは、準2級より2級で抽象度がやや高く、単語の難易度は2級の方が高かった。様々なトピックの英文読解に自信をもって取り組み、知らない単語が出てきた時にも意味を推測して読み進める力を付けさせる必要があることが分かった。

**リサーチ・クエスチョン**

生徒が初見の英文をスムーズに読み進め、的確に概要や要点を把握し、能動的に読解力の向上に努めようとする態度を育成するにはどのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・英検準2級4Bで5問中4問以上正解する生徒が全体の7割以上になる。
  - ・英検2級3Cで5問中4問以上正解する生徒が全体の4割以上になる。
  - ・アンケート調査で、英語の学習が「好き」「どちらかといえば好き」と回答する生徒が全体の8割以上になる。

**改善のための手立て**

- 語彙指導を工夫すれば、単語の難易度が上がっても自分の力で英文を読み進めることができるようになるだろう。
  - ・単元の新出語彙を発表語彙と受容語彙に分け、発表語彙については写真などのヒントから単語の意味を推測する活動にプレリーディングで取り組ませる。
  - ・単元の新出語彙のうち一部の語彙については事前に意味を与えず、未知語を推測する読解タスクに取り組ませる。
- リーディング活動を工夫すれば、英文を能動的に読めるようになり、概要や要点を的確に把握することができるようになるだろう。
  - ・プレリーディングでオーラルイントロダクションやリスニング活動によりスキーマを活性化する。

- ・概要や要点を捉える読解タスクに取り組みさせる。
  - ・ポストリーディングで読み手に分かりやすく伝えることを意識したサマリーライティングに取り組み、よりの確な読みを促す。
- 初見の英文を与えて自主的に学ぶ機会を増やし、フィードバックで理解を支援すれば英文読解に対する自信が高まり、能動的に読解力の向上に努めるようになるだろう。
- ・教科書本文のテーマに関連する英文を家庭学習のための課題として与え、概要・要点問題に取り組みさせる。
  - ・読後に内容理解はどれだけできたか、どの英文が読みづらかったかをグループフォームで提出させ、読みづらかった文の構造を授業で解説する。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回英文読解テスト（12月実施：受験者数 74）

問題構成は第1回英文読解テストと同様である。

	0～1点	2点	3点	4点	5点
準2級4B	4人 (5.4%)	5人 (6.8%)	11人 (14.9%)	30人 (40.5%)	24人 (32.4%)
2級3C	19人 (25.7%)	30人 (40.5%)	18人 (24.3%)	6人 (8.1%)	1人 (1.4%)

#### <分析と考察>

準2級の問題で4点以上得点した生徒の割合は73.0%となり、第1回の37.7%から大きく上昇し、改善の目安とした全体の7割以上を達成した。両方を受験した73名に対し、事前・事後のデータを検定（paired *t*検定）にかけたところ、有意な向上が認められ（ $p=0.02<0.05$ ）、着実に読む力は身に付いてきていると考える。一方、2級の問題で4点以上得点した生徒の割合は9.5%となり、第1回の13.0%から減少し、改善の目安とした全体の4割以上を達成できなかった。英文の難易度が高くても、自分の力で読み進めることができるように継続的な指導が必要であることが分かった。

- ・第2回英語の授業に関わるアンケート（12月実施：回答者数 74）

1. あなたは英語の学習が好きですか、嫌いですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
14人 (18.9%)	38人 (51.4%)	17人 (23.0%)	5人 (6.8%)

2. 初見の英文を読む時、本文の概要を素早く理解することができますか。

かなりできている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
3人 (4.1%)	33人 (44.6%)	32人 (43.2%)	6人 (8.1%)

3. 学校での英語の授業を通して、自身の「英語を読む力」は以前に比べ向上したと思いますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
21人 (28.4%)	32人 (43.2%)	20人 (27.0%)	1人 (1.4%)

### <分析と考察>

英語の学習を「好き」「どちらかといえば好き」と回答した生徒は全体の約7割で、改善の目安とした8割以上を達成しなかった。授業中、ワークシートの概要や要点を問う問題に誤答する生徒が散見されたことから、誤答したことにより自信をなくし、前向きな姿勢を持てなかった可能性がある。また、本文の概要を素早く理解することが「かなりできている」「まあまあできている」と回答した生徒の割合が73.3%から48.6%に減ったことについては、第2回アンケート調査の直前に実施した第2回英文読解テストの英検2級の問題が難しかったことが影響した可能性がある。ただし、自身の「英語を読む力」について、71.6%の生徒が以前に比べて（どちらかといえば）向上したと感じており、自由記述に「文型を理解して読めるようになり、読める単語が増えたので意味をとりやすくなった」という回答も見られたことから、多くの生徒が能動的に読解力の向上に努めようとしており、手立てに一定の効果があつたと推測できる。

### **教師の変化**

単元の指導計画を立て、ワークシートを作成する時、4技能のうちどの技能を伸ばしたいのかを明確にして考えるようになった。伸ばしたい技能を明確にすることで、授業のねらいの焦点化がしやすくなり、効果的な時間配分を考えられるようになった。

### **今後の課題（次の改善点など）**

生徒の読解力の伸長のため、課題と考えられる語彙力の向上を目指したい。ただ単語の意味を教えるだけではなく、生徒の語彙力を真に向上させる様々な活動に取り組みせたい。

### **まとめ・感想**

この研修に取り組むきっかけとなったのは異動であった。多くの生徒が一定の英語力を持つ学校で、自分の指導を意味のあるものにするためにはどうしたら良いのか悩んでいた時に、この研修の存在を知った。この研修を受けてから、どの技能を伸ばすべきかを単元の指導計画を立てる前に考え、そのためにどのようなワークシートを作成すべきか、どのようなアクティビティを取り入れるべきかを深く考えるようになった。そのようにすることで、自分の指導の方向性が明確になり、教室全体の雰囲気にも大きな影響を与えたように感じる。この研修を機に、これからも継続して学び、自己研鑽に励みたいと強く思うことができた。御指導していただいた全ての先生方に、心から感謝を申し上げたい。

### **授業改善にあたって参考にした資料等**

サンドラ・シルバスタイン. (1997). 『自立した読み手を育てる新しいリーディング指導』大修館書店.  
白井恭弘. (2012). 『英語教師のための第二言語習得論入門』大修館書店.

## 深い理解につながる読みを目指したリーディング指導

科目名	英語コミュニケーションⅠ	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス106名（男子58名、女子48名）の生徒である。多くの生徒が4年制大学への進学を希望している。各クラスの雰囲気は落ち着いており、ペアやグループでの活動もお互いに協力し合い、授業に対して積極的かつ真面目に取り組む様子が見られる。

### 解決すべき課題

教科書本文について、英問英答で内容理解を確認すると、英文に直接書かれた情報を読み取らせる問いについては概ね答えることができているが、英文に直接情報が示されていない中で答えを書かせる問いや英文の内容が言い換えられている問いには解答に戸惑う様子が見られる。英文から情報を見つけ、問いに答えられていれば「読むことができている」と考えるのではなく、教員が「生徒が読んだ内容を自身でどこまで整理することができるか」をより踏み込んで確認しながら指導していく必要がある。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

生徒のリーディングに関する意識について調査した。

- ・第1回英語学習に関するアンケート（4月実施：回答者数92）

1. 英語を読む力はこれからの生活のなかで必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
79人 (85.9%)	13人 (14.1%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)

2. 初見の英文を読む時、英文の概要を素早く理解することができますか。

かなりできている	まあまあできている	あまりできていない	ほとんどできていない
8人 (8.7%)	54人 (58.7%)	30人 (32.6%)	0人 (0.0%)

3. 初見の英文を読む時、筆者の主張だと思われる部分や、大切だと思われる文を探しながら読むことを意識していますか。

かなり意識している	まあまあ意識している	あまり意識していない	ほとんど意識していない
17人 (18.5%)	49人 (53.3%)	24人 (26.1%)	2人 (2.2%)

#### <分析と考察>

英語を読む力について尋ねたところ、大半の生徒がその必要性を強く感じていることが分かった。また、「初見の英文について、概要を素早く理解できるか」について、「あまりできていない」と感じ

ている生徒が 30 人 (32.6%) いたこと、「筆者の主張だと思われる部分や、大切だと思われる文を探しながら読むことを意識しているか」について、「あまり意識していない」「ほとんど意識していない」と答えた生徒が 26 人 (28.3%) いたことから、集団全体に対する読むことの指導としては、読解タスクや発問等を工夫して英文の内容を深く理解させるとともに、概要や要点を探しながら読む意識を持たせることが重要だと考えられる。

・第 1 回読解力テスト (5 月実施：受験者数 93)

過去の英検準 2 級と 2 級の選択式の長文読解問題を使って生徒の読解力を調べた。

準 2 級 (4 点満点)

点数	0 点	1 点	2 点	3 点	4 点	得点率 60% (3 点) 以上	平均点
人数	1 人 (1.1%)	8 人 (8.6%)	19 人 (20.4%)	46 人 (49.5%)	19 人 (20.4%)	65 人 (69.9%)	2.8

2 級 (5 点満点)

点数	0 点	1 点	2 点	3 点	4 点	5 点	得点率 60% (3 点) 以上	平均点
人数	4 人 (4.3%)	23 人 (24.7%)	23 人 (24.7%)	22 人 (23.7%)	12 人 (12.9%)	9 人 (9.7%)	43 人 (46.3%)	2.5

<分析と考察>

準 2 級の問題については、生徒の平均点が 2.8 点 (得点率 70%) となっており、英検準 2 級の合格に向けては約 60%の得点率が必要とされると言われていることを考えると、1 年生の 5 月としてはよく得点できていた。2 級の問題については、英文の概要理解を問う問題で得点できなかった生徒が多かったようだ。

生徒の解答を分析すると、準 2 級、2 級ともに、英文の内容が言い換えられているような問題において正答できておらず、英文の内容を正しく整理できていない状態にある生徒が多いと考えられる。

**リサーチ・クエスチョン**

生徒が英文の内容を深く理解して、的確に概要や要点が捉えられるようになるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：英検の準 2 級、2 級のリーディング問題で得点率 60%以上の生徒が全体の 70%以上になる。

**改善のための手立て**

- 英文の中身を捉える前の活動を工夫すれば、英文の要点をスムーズに把握できるようになるだろう。
  - ・ ICT を活用し、英文のトピックに関する写真、動画、音声等について意見交換することで、興味・関心を深め、英文を自ら読み進める姿勢を身に付けさせる。
  - ・ 英文に関するオーラルイントロダクションやクイズによりスキーマを活性化させる。
  - ・ 英文のリスニング活動により聞き取れた内容をペアで確認させて、全体の概要を把握させる。
  - ・ 英文を読んで、文章構成を確認させるとともに各パートの概要を把握させる活動を行う。



- 英文の内容を捉える活動を工夫すれば、生徒が深く内容を理解し、概要や要点を的確に把握できるようになるだろう。
  - ・事実発問、推論発問、評価発問に答えさせ、進んで英文の内容理解を深める姿勢を身に付けさせる。
- 内容を捉えた後の活動を工夫すれば、概要や要点をより正確に捉えることができるだろう。
  - ・読んだ英文の内容について相手に説明したり、自分の意見を伝えたりする活動を行うことで、英文の概要や要点をよりの確に理解させる。
  - ・グラフィックオーガナイザーで整理した英文の概要や要点を活用して、リテリングを行わせる。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回英語学習に関するアンケート（12月実施：回答者数 99）

以下のうち、英語を読む時に、今年の4月と比べて「できるようになった」と感じるものがあれば、選択してください。（複数回答可）

質問	人数
英文の概要を素早く理解できるようになった。	34人 (34.3%)
英文の情報を正確に読み取ることができるようになった。	23人 (23.2%)
未知語が出てきても推測しながら読めるようになった。	26人 (26.3%)
英文の内容により興味が持てるようになった。	22人 (22.2%)
筆者の主張だと思われる部分や、大切だと思われる文を探しながら読むことが意識できるようになった。	29人 (29.3%)
筆者の主張や気持ちを考えながら読むことができるようになった。	23人 (23.2%)
英文の内容をより深く理解できるようになった。	26人 (26.3%)

#### <分析と考察>

「英文の概要を素早く理解できるようになった」と回答した生徒が 34人 (34.3%)、「筆者の主張だと思われる部分や、大切だと思われる文を探しながら読むことが意識できるようになった」と回答した生徒が 29人 (29.3%)、「英文の内容をより深く理解できるようになった」と回答した生徒が 26人 (26.3%) であった。読んだ内容をグラフィックオーガナイザーに整理して、それを基に他者に英文の概要や要点を説明する活動を通じて英文の内容理解が深まるとともに、英文の中身を理解する際に、概要や要点を把握することを意識しながら読み進める生徒が増えたと考えられる。

- ・第2回読解力テスト（12月実施：受験者数 93）

過去の英検準2級と2級の選択式の長文読解問題を使って生徒の読解力を調べた。

#### 準2級（4点満点）

点数	0点	1点	2点	3点	4点	得点率 60%以上 (3点) 以上	平均点
人数	0人 (0.0%)	8人 (8.6%)	17人 (18.3%)	33人 (35.5%)	35人 (37.6%)	68人 (73.1%)	3.0

## 2級（5点満点）

点数	0点	1点	2点	3点	4点	5点	得点率60%以上 (3点)以上	平均点
人数	10人 (10.8%)	24人 (25.8%)	30人 (32.3%)	19人 (20.4%)	6人 (6.5%)	4人 (4.3%)	29人 (31.2%)	2.0

### <分析と考察>

準2級の問題では前回と比較して平均点が上昇し、「得点率60%以上の生徒が全体の70%以上になる」という改善の目安を達成した。生徒が正確に内容を把握し、深い読みを行うスキルを高めたと考えられる。また個々の生徒の伸びについて *t* 検定（対応のあるデータ）を行ったところ、有意差が認められた ( $p=0.02<0.05$ )。しかし2級では前回と比較して、平均点が低下し、改善の目安を達成することができなかった。理由としては、第1回は英文のトピックが「パイナップルの歴史」で、比較的具体的な記述が多かったのに対し、第2回は「古代の歴史」についてのやや抽象的な内容であり、内容理解に困難を感じる生徒が多かったのではないかと考えられる。

## **教師の変化**

単元全体を通して見通しを持った指導計画を立てたり、日々の授業や各活動の中で明確なねらいをもったりすることが必要だと実感した。また授業中の生徒の様子や発言、自らの指示や発問の仕方等に、より注意を向けるようになった。

## **今後の課題（次の改善点など）**

取組全体を通じて、生徒に、概要や要点を捉えながら英文を読み進めることの意識付けをさせることができたと考える。今後の課題として、今回の第1回、第2回の読解力テストで扱った問題では、内容のなじみややすさに差があったことが各回の生徒の得点に影響したことが考えられるが、どのような英文であっても対応できる読解力を育成するためには、継続的な語彙指導等についても手立てを考え、実践していく必要があると実感した。

## **まとめ・感想**

今回の研究は今まで漠然と行っていた自らの指導を振り返る良い機会となった。自分自身、英文のより深い内容理解のための導入の仕方や発問、読解タスク等の工夫について授業内で実践をしながら、様々な観点からより良い教科指導法について理解を深めることができた。今回のアクション・リサーチで行った、自ら課題を設定し、その解決のために様々な手立てを通して解決を図りつつ、生徒の様子を観察し、指導の成果を見取っていくという一連の活動は今後の自らの指導力向上のためにも有益であると思うので、今後は今回学んだ研究者としての視点ももちながら教科指導に努めていきたい。

## **授業改善にあたって参考にした資料等**

卯城 祐司.(2011).『英語で英語を読む授業』研究社.

高橋 一幸.(2019).『Q&A 高校英語指導法事典—現場の悩み 133 に答える』教育出版.

## 英文を「自分ごと」として読み進める力を養うリーディング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅲ	学年	3	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス72名（男子47名、女子25名）の生徒である。素直な生徒が多く、ペアワークやグループワークには積極的に参加するが、自分の意見を述べることを求めると自信が無さそうな様子があり、英語に対する苦手意識をもつ生徒も多い。ほとんどの生徒が4年制大学への進学を希望しており、約半数が学校推薦型および総合型選抜、残りの半数が一般選抜で大学への進学を目指している。

### 解決すべき課題

授業中の様子や小テストでの解答内容から、ほとんどの生徒が英文全体の概要や各段落の要点を読み取ることに慣れていないため、英文の主題や筆者の主張を尋ねても答えることができていない。生徒が教材の内容を身近に感じて読み進め、概要や要点を的確につかむことができる力を身に付けさせたいと考える。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回英語学習に関するアンケート調査（5月実施：回答者数72）

生徒のリーディングに対する興味関心、自信等について意識調査をした。

1. あなたは英語の学習が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
5人 (6.9%)	26人 (36.1%)	32人 (44.4%)	9人 (12.5%)

2. あなたは初見の英文を読む時、筆者の主張だと思われる部分や、大切だと思われる文を探しながら読むことを意識していますか。

かなり意識している	まあまあ意識している	あまり意識していない	ほとんど意識していない
5人 (6.9%)	28人 (38.9%)	32人 (44.4%)	7人 (9.7%)

3. 英語学習について、困っていることやわからないこと、知りたいことがあれば書いてください。

（以下、リーディングに関連する記述を一部抜粋）

- ・長文問題の勉強の仕方がわからない。 ・スラスラと読めない。
- ・長い文章になるとどう読み解いていいのかわからない。

#### <分析と考察>

アンケートでは、全体の54.2%の生徒が、英文を読む際に、筆者の主張等を「あまり意識していない」「ほとんど意識していない」と回答していた。また記述回答から、長文読解の方法について悩みを

もつ生徒がいることが分かった。このような状況を踏まえて、生徒が概要や要点を把握しながら読み進められるよう指導を行い、英文読解に前向きに取り組む生徒を増やしたいと考えた。

- ・第1回読解力テスト（5月実施：12点満点、受験者数57）

英検2級（3A～C）の過去の長文読解問題を使って生徒の読解力を調べた。

平均点	最高点	最低点	中央値	標準偏差	得点6点以下	得点9点以上
6.3	12	0	6	2.56	33人 (57.9%)	15人 (26.3%)

人数の分布

点数	0～2点	3、4点	5、6点	7、8点	9、10点	11、12点
人数	2人 (3.5%)	16人 (28.1%)	15人 (26.3%)	9人 (15.8%)	12人 (21.1%)	3人 (5.3%)

<分析と考察>

26.3%の生徒が9点以上得点した一方で、得点が6点以下の生徒が57.9%となった。英文の概要を問う問題で空欄の生徒もおり、概要や要点の把握に苦戦している様子が見ええた。授業中の教師側の発問を工夫して、生徒の的確な内容理解を導くことで、生徒が概要や要点の把握を意識して英文を読むことができるようになるのではないかと考えた。

## リサーチ・クエスチョン

英検2級レベルの英文を「自分ごと」として読み進め、概要や要点を的確に把握できるようになるには、どのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
  - ・全体の80%以上の生徒が概要や要点の把握を意識して読解に取り組むようになる。
  - ・第2回読解力テストで9点以上得点する生徒が全体の60%以上になる。

## 改善のための手立て

- プレリーディング活動を工夫すれば、生徒は英文の内容を身近に感じ、「自分ごと」として読み進めるようになるだろう。
  - ・実際に英文を読む前に、See-Think-Wonderを用いて、生徒が気付いたこと、考えたこと、疑問に思ったことをワークシートに記録させる。
  - ・Think-Pair-Shareを用いて、生徒が一人で問いに対する答えを考え、ペアになって意見や疑問点を共有した後、クラス内で発表して、意見や疑問点を共有させる。
- リーディングタスクを工夫すれば、生徒は内容をより「自分ごと」と捉え、概要や要点を的確に理解することができるだろう。
  - ・Topic, Gist, and Logicの手法で、概要や筆者の意図に注目させることで、よりの確に英文の内容を捉えようとする習慣を身に付けさせる。
  - ・推論発問への解答を生徒同士共有する活動を行わせる。
  - ・評価発問に解答させて、生徒が英文の主題についてより深く考える機会を作る。

※Topic, Gist, and Logicとは、全文の内容を大まかに把握してから、各段落の趣旨を把握する活動である。

- リーディングストラテジーを指導すれば、概要や要点を的確に把握できるようになるだろう。
  - ・ ディスコースマーカーに注目させ、論理展開を意識して読むように指導する。
  - ・ 概要や要点の理解のカギとなる動詞句の意味を、前後の文脈から推測させる。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・ 第2回英語学習に関するアンケート調査（12月実施：回答者数 60）

生徒のリーディングに対する興味関心、自信等について意識調査をした。

1. 今年の授業を振り返って、あなたは英語の学習が好きになりましたか、嫌いになりましたか。

好きになった	どちらかといえば好きになった	どちらかといえば嫌いになった	嫌いになった
5人(8.3%)	32人(53.3%)	20人(33.3%)	3人(5.0%)

2. あなたは初見の英文を読む時、筆者の主張だと思われる部分や因果関係など、大切だと思われる文を探しながら読むことを意識するようになりましたか。

かなり意識するようになった	まあまあ意識するようになった	あまり意識するようになっていない	ほとんど意識するようにならなかった
11人(18.3%)	33人(55.0%)	15人(25.0%)	1人(1.7%)

3. 英語学習について、困っていることやわからないこと、知りたいことがあれば書いてください。

（以下、リーディングに関連する記述を一部抜粋）

- ・ 読むスピードを上げたい。 ・ 最後まで読み切る体力がない。
- ・ 医療系の文で、日本語でも難しい単語が出てくると、さっぱりわからなくなってしまう。
- ・ (自分の) 課題がわかっているけど、結果がついてこない。 ・ 効率の良い速読の方法が知りたい。

#### <分析と考察>

第2回のアンケートでは、61.7%の生徒が英語学習を「(どちらかといえば) 好きになった」と回答しており、受験勉強など重圧を感じる中でも、一定数の生徒が前向きな姿勢で英語学習に取り組んでいたと評価できる。また、『「大切だと思われる文を探しながら読むこと」を意識するようになった」と答えた生徒の割合は、改善の目安の80%に到達しなかったが、第1回のアンケート結果の45.8%から大幅に増加し、73.3%に達した。また、「英語学習について困っていることやわからないこと、知りたいこと」への回答には、「何について書かれているかを考えながら読むようになった」「英文を読むのが楽しく感じるようになった」との生徒からのコメントがあり、英文の内容を身近なことと感じながら読み進める生徒が増えたと考える。

- ・ 第2回読解力テスト（12月実施：12点満点、受験者数 61）

英検2級（3A～C）の過去の長文読解問題を使って生徒の読解力を調べた。

平均点	最高点	最低点	中央値	標準偏差	得点6点以下	得点9点以上
6.8	12	2	7	2.43	24人(39.3%)	13人(21.3%)

人数の分布

点数	0～2点	3～4点	5～6点	7～8点	9～10点	11～12点
人数	2(3.3%)	11(18.0%)	11(18.0%)	24(39.3%)	9(14.8%)	4(6.6%)

## <分析と考察>

第2回読解力テストで9点以上得点した生徒は全体の21.3%で、第1回読解力テスト時の26.3%を下回り、改善の目安に到達しなかった。しかし、9点以上得点した生徒の伸びについて対応のある2群間の比較(Wilcoxonの符号付順位検定)を行ったところ、有意差が認められた( $p=0.00<0.05$ )。また、得点6点以下の生徒の割合は、第1回(57.9%)と比較して、18.6ポイント低下して39.3%となり、平均点も0.5点上昇、中央値も1点増加したことから、中間層の生徒の読むことの技能の向上を見取ることができる。特に、推論発問や評価発問など、生徒にとって慣れない問いに対して、Think-Pair-Share等により、お互いの考えや感想を共有できる機会を重ねる手立てを講じたことで、生徒は英文の内容をより身近に感じ、的確に理解する力を伸ばしたと考えている。

## **教師の変化**

アクション・リサーチの実践を通して、生徒に身に付けさせたい知識や様々な技能を「どのように」指導すればより効果的な指導になるかを考えるようになった。そのため、授業中の机間指導の際などに、これまで以上に生徒の様子を注意深く観察して、生徒に適した指導方法を考えるようになった。

また、生徒に身に付けさせたい力について考える際に、各単元の指導計画だけではなく、「年間及び3年間を通してどのような力を身に付けさせたいか」を考えるようになった。

## **今後の課題(次の改善点など)**

- ・推論発問と評価発問を用いた指導についてさらに経験を積み、より良い発問を工夫したい。
- ・既習の文法事項の復習を行い、生徒が読んだ内容を正しく捉えることができるようにしたい。
- ・未知語の推測の仕方を指導して、生徒が概要や要点をより的確に把握できる力を伸ばしたい。
- ・アクション・リサーチによる授業改善を継続することで、生徒のリーディング力のみならず、他の技能についても伸長を図りたい。

## **まとめ・感想**

この研修に参加して、様々な教授法や指導技術、授業づくりの方法について新たな知識を得て、組織的な授業改善について、より具体的に勤務校の課題を考えられるようにもなった。授業づくりを個人技と捉えるのではなく、組織人としてどのように授業改善に貢献できるかをこれからも考え続けて行動していきたい。また、この研修に参加できたおかげで、手厚く指導をしてくださった先生方と熱意ある他校の先生方から多くの刺激をもらった。来年度はより効果的な授業改善ができるように、この研修で学んだことを自分のものとして活用し、より良い授業を提供できるよう、自己研鑽に励んでいきたい。

## **授業改善にあたって参考にした資料等**

田中武生・島田勝正・紺渡弘幸(編著).(2011).『推論発問を取り入れた英語リーディング指導』三省堂.  
鈴木寿一・門田修平(編著).(2012).『英語音読指導ハンドブック』大修館書店.

## 正しい語順と時制を用いてやり取りする力を伸ばすスピーキング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	2	形態	HR・習熟度・小集団
-----	--------------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は2クラス77名（男子36名、女子41名）の生徒である。日々の授業における対話的な言語活動には積極的に取り組むものの、中学校の既習内容も含めて基礎・基本の定着が十分とは言えない状況である。例年約7割の生徒が、推薦入試を利用して4年制大学や専門学校に進学する。

### 解決すべき課題

授業内のスピーキング活動において、意味の伝達に支障をきたす誤りが多く見られる。日々の授業の中で、言語活動に加えて基礎的な言語知識や言語操作に関する簡潔で明示的な指導が必要であると考えられる。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回アンケート（5月実施：回答者数71）

1. あなたは英語を使うことが得意ですか、苦手ですか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
0人(0.0%)	7人(9.9%)	9人(12.7%)	55人(77.5%)

2. あなたは英語を使うことが好きですか、嫌いですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
0人(0.0%)	6人(8.5%)	8人(11.3%)	57人(80.3%)

#### <分析と考察>

90.1%の生徒が「英語を使うことが（どちらかといえば）苦手」、91.5%の生徒が「英語を使うことが（どちらかといえば）嫌い」と回答した。自由記述欄では、「もっと話せるようになりたい」というコメントが複数あった一方で、「間違えるのが怖い」という旨の記述も同様に複数見られた。これらのことから、「ある程度自信をもって話せるようになること」が生徒の主なニーズであると考え、スピーキング能力を伸ばすことを目標に設定した。

- ・第1回スピーキングテスト（5・6月実施：受験者数75）

テスト内容：身近な事柄に関する教師からの質問に対して英語で応答する。

評価方法：以下のルーブリックによる評価

	内容	話し方
A	概ね正しい文法を使って、明確に内容を伝えることができる。	概ね正しい発音で、言いよどみなく話している。
B	多少の文法の誤りはあるが、必要な内容を伝えることができる。	多少の発音の誤りや言いよどみはあるが、伝わる話し方で話している。
C	文法の誤りが多いなど、必要な内容を伝えるのが困難である。	発音の誤りや言いよどみが多く、伝わりにくい話し方である。

結果：

	内容	話し方
A	10人 (13.3%)	3人 (4.0%)
B	37人 (49.3%)	37人 (49.3%)
C	28人 (37.3%)	35人 (46.7%)

### <分析と考察>

「内容」では、62.7%の生徒が B 評価以上となり、教師の質問の内容を理解し、応答に必要な内容を伝えることができていた。しかし、C 評価となった生徒は、質問の内容を理解することができず、会話の文脈に合わない受け答えをするなど、適切な応答に課題があった。「話し方」では、5割弱の生徒が、質問に対して沈黙したり、会話の応答に著しく不自然な間があったりしたため、C 評価となった。生徒は、発信と受容の両面における基礎的な言語知識の習得が必要なだけでなく、自然な会話を継続するための会話方略の練習が必要であると感じた。

## リサーチ・クエスチョン

身近な事柄について、基礎的な語彙・文法を用いて、時制に気を付けながら自信をもってやり取りする力を身に付けさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：

- ・スピーキングテストのルーブリック評価の各項目において B 評価以上の生徒がそれぞれ全体の7割以上になる。
- ・事後のアンケートで「英語を使うことが（どちらかといえば）得意」「英語を使うことが（どちらかといえば）好き」と回答する生徒がそれぞれ全体の7割以上になる。

## 改善のための手立て

- 基礎的な言語知識と言語操作を習得すれば、抵抗感なく自信をもって英語を発することができるようになるだろう。
  - ・基礎的な言語知識を明示的に指導し、主語と動詞の構造や疑問文における言語操作の練習を継続的に行う。
  - ・日常会話でよく使用される動詞（句）リストを用いて、主語や時制による語形の変化にフォーカス



したパターンプラクティスを口頭で行う。

○ 身近な話題に関するスキット練習を繰り返せば、より英語を身近に感じ、楽しみながら学習に取り組むだろう。

- ・会話フレームを用いて、やり取りに必要な表現を支援しながら、即興的な質問・応答を含む自己表現活動を行う。
- ・継続的なスキット練習を通じて、「目的・場面・状況」に応じた英語表現の定着を図る。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

・第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数73）

テスト内容：指定された時制（「未来」「過去」どちらか）で生徒から質問を始め、教師と1分間のやり取りを続ける。

評価方法：以下のループリックによる評価（第1回と同じループリックを使用）

結果：

	内容		話し方	
	第1回	第2回	第1回	第2回
A	10人 (13.3%)	28人 (38.4%)	3人 (4.0%)	14人 (19.2%)
B	37人 (49.3%)	35人 (47.9%)	37人 (49.3%)	37人 (50.7%)
C	28人 (37.3%)	10人 (13.7%)	35人 (46.7%)	22人 (30.1%)

<分析と考察>

会話の冒頭で、大半の生徒が“Did you ~?”や“Are you going to ~?”を用いて、正しい時制で発話を開始していたが、基本的な動詞句の定着が不十分な生徒は、やり取りを続けることに課題が見られた。第2回テストは応答だけでなく、質問と応答を含むテスト内容であったにもかかわらず、「内容」は、86.3%の生徒が、「話し方」は69.9%の生徒がB評価以上となり、改善の目安を概ね達成することができた。A評価の生徒数が両項目共に大幅に増加しており、日常の活動に効果があったと考えられる。事前・事後のデータのそろっている71人について、検定（Wilcoxonの符号付順位検定）を行ったところ、どちらの項目でも有意な向上が認められた（ $p=0.00<0.05$ ）。

・第2回アンケート（12月実施：回答者数65）

1. あなたは英語を使うことが得意ですか、苦手ですか。

	得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
第1回	0人 (0.0%)	7人 (9.9%)	9人 (12.7%)	55人 (77.5%)
第2回	1人 (1.5%)	27人 (41.5%)	27人 (41.5%)	10人 (15.4%)

2. あなたは英語を使うことが好きですか、嫌いですか。

	好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
第1回	0人 (0.0%)	6人 (8.5%)	8人 (11.3%)	57人 (80.3%)
第2回	3人 (4.6%)	28人 (43.1%)	7人 (10.8%)	27人 (41.5%)

<分析と考察>

第2回アンケートでは、英語を使うことについて「(どちらかといえば) 得意/好き」と回答する生

徒はそれぞれ5割を下回り、改善の目安を達成することはできなかった。質問1・2共に第1回より平均値が向上したため、事前・事後のデータのそろっている59人について、検定（Wilcoxonの符号付順位検定）を行ったところ、どちらにも有意な向上が認められた（ $p=0.00<0.05$ ）。

アンケート自由記述欄に寄せられたコメントに目を向けると、「実力が付いたことが実感できた」「考えながら話すことで自分の理解度も分かる」「話す力だけでなく、聞く力や読む力も付いた気がする」といった前向きなコメントがあった一方で、「少しできるようになったからと言って、好きにはならない」「やっぱり英語に興味をもてない」「続けなければいいのだろうけど、そこまではたくない」といった、やや後ろ向きなコメントもあった。英語への興味他、学習そのものへの好奇心を喚起する方法を模索する必要がある。

## **教師の変化**

- ・ language-focused と meaning-focused のバランスを考慮して授業を構成するようになった。
- ・ 生徒の発話に対してより注意を向けるようになり、error-correction のタイミングややり方（recast か prompt か明示的説明か）を意識するようになった。

## **今後の課題（次の改善点など）**

- ・ 基礎的な文法の知識、特に動詞句の確実な習得と活用を目指す。
- ・ 生徒の興味・関心を高めるコンテンツや活動の種類を充実させる。

## **まとめ・感想**

教職歴が長くなるにつれ、相応に経験や直感が蓄積されてきたが、それに頼ることのない確固たる理論に裏打ちされた授業を実践したいと考え、本研修に参加した。集合研修では、志を同じくする仲間にも恵まれ、毎回新しい知識や方法論を学べる喜びを感じると同時に、目的と手段を結びつけることについてこれまでの授業でいかに精度が低かったかを痛感した。また授業での取組では、教員が活動の目的と最低限の説明を示すだけで、生徒たちは自ら挑戦し、驚くほどの速度で英語力を身に付けた。このことを通じて、「教えすぎないこと」の大切さも実感した。御指導いただいた先生方、共に切磋琢磨した他校の先生方、こちらの思いに共鳴し果敢に挑戦してくれた生徒たちに、感謝の意を表す。

## **授業改善にあたって参考にした資料等**

- 菅正隆・松下信之.(2022).『ペーパーテスト・パフォーマンステスト例が満載！高等学校外国語 新3 観点の学習評価完全ガイドブック』明治図書.
- 内田洋子・杉本淳子.(2020).『英語教師のための音声指導Q&A』研究社.
- 横山雅彦・中村佐知子.(2021).『スピーキングのためのやりなおし英文法スーパードリル 英語のハノン 初級』筑摩書房.
- ニック・ウィリアムソン.(2021).『見るだけで英語ペラペラになる A4一枚英語勉強法』SB Creative.

## 聞き手の理解を意識し自信をもって話せる力を育てるスピーキング指導

科目名	英語表現 I	学年	3	形態	HR・習熟度・ <span style="border: 1px solid black;">小集団</span>
-----	--------	----	---	----	---

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3学年の選択科目の生徒21名（男子18名、女子3名）である。進路希望に関しては、6割が就職、4割が進学を目指しているのが本校の例年の傾向である。基礎的な文法や語彙の知識が十分に身に付いておらず、英語に苦手意識をもっている生徒も多い。本クラスは選択科目であるということもあり、英語学習に対して積極的で、真面目に取り組む生徒がほとんどである。しかし、ペアやグループでの対話的な学習活動が苦手な生徒もいるため、そのような生徒にも取り組みやすい授業の組み立てや進行に留意する必要がある。

### 解決すべき課題

身近な話題について話す活動は継続的に行っており、一定の支援を活用することでペアによる即興的な数回のやり取りをすることはできている。しかし、クラスに向けた発表活動になると、原稿を読むことで精一杯になる生徒が多い。日本語によるクラスへの発表では、比較的堂々と発表をする姿が見られるため、英語による発表や発話に対して自信をもてないことが課題として挙げられる。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回アンケート（5月実施：回答者数15）

1. あなたは英語の学習が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
9人 (60.0%)	6人 (40.0%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)

2. あなたは英語が得意だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
1人 (6.7%)	6人 (40.0%)	5人 (33.3%)	3人 (20.0%)

#### <分析と考察>

生徒全員が英語の学習が「好き」か「どちらかといえば好き」と答えていた。一方で、「英語が得意か」という質問に対する回答から、約半数が苦手意識をもっているということが分かった。また、記述による回答からは「英語の発音が苦手」というものが複数あったため、英語学習に対して好意的な印象をもっている生徒に対し、身近な話題に関する発表活動と、英語の発音指導を通じて、生徒に自信をもたせる指導を目指すべきと考えた。

・第1回スピーチテスト（7月実施：受験者数15）

テスト内容：“Self-introduction”をテーマとした発表

評価方法：以下のルーブリックによる評価

	発音			声		態度
	語の発音	音の連結	強勢	大きさ	速さ	
A	全体の8割以上を英語らしい発音で話すことができる。	全体の8割以上を語と語のつながりに気を付けて話すことができる。	全体の8割以上を正しい強勢で話すことができる。	聞き手が聞き取りやすい声の大きさを話すことができる。	聞き手が聞き取りやすい速さで話すことができる。	アイコンタクトや身振りを自然に用いて言いたいことを伝えようとしている。
B	全体の半分以上を英語らしい発音で話すことができる。	全体の半分以上を語と語のつながりに気を付けて話すことができる。	全体の半分以上を正しい強勢で話すことができる。	聞き手が聞き取れる声の大きさを話すことができる。	聞き手が聞き取れる速さで話すことができる。	言いたいことを伝えようとしている。
C	全体の半分以上を英語らしい発音で話すことができない。	全体の半分以上を語と語のつながりに気を付けて話すことができない。	全体の半分以上を正しい強勢で話すことができない。	聞き手が聞き取れる声の大きさを話すことができない。	聞き手が聞き取れる速さで話すことができない。	言いたいことを伝えようとしていない。

結果：

	発音			声		態度
	語の発音	音の連結	強勢	大きさ	速さ	
A	3人 (20.0%)	4人 (26.7%)	1人 (6.7%)	1人 (6.7%)	5人 (33.3%)	2人 (13.3%)
B	5人 (33.3%)	3人 (20.0%)	6人 (40.0%)	11人 (73.3%)	10人 (66.7%)	12人 (80.0%)
C	7人 (46.7%)	8人 (53.3%)	8人 (53.3%)	3人 (20.0%)	0人 (0.0%)	1人 (6.7%)

<分析と考察>

「発音」の各項目でB以上の評価は全体の50%前後にとどまった。一方、「声」と「態度」の各項目においては、B以上の評価は全体の80%以上であったが、A評価は全体の30%程度かそれ以下であった。また、発表後の生徒の感想には「自分の発音があっているかどうか不安」といったコメントが複数見られた。そのため、英語らしい発音の指導を重点的に行うことで、生徒の英語に対する自信につながられるような手立てを講じる必要があると感じた。

**リサーチ・クエスチョン**

身近な話題について、自信をもって、相手に伝わりやすい発表ができるようにするためには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：・ルーブリックの「発音」の各項目でB評価以上になる生徒が8割以上になる。

・ルーブリックの「声」と「態度」の各項目でA評価になる生徒が5割以上になる。

・アンケートの「あなたは英語が得意だと思いますか」という質問に「得意」「どちらかというと得意」と答える生徒の合計が全体の8割以上になる。

## 改善のための手立て

- 場数を増やし、段階的な発表練習を行えば、自信をもって話すことができるようになるだろう。
  - ・発表をペアなど少人数から行い、英語での発表に慣れさせ、クラス全員を前にした発表に対して抵抗感を感じさせない指導を行う。
- 明示的な発音指導をすることで相手に伝わりやすい発話ができるようになるだろう。
  - ・発音記号に親しませることで、発音に対する意識を向上させる。
  - ・単語同士の音の連結や変化、イントネーション、強勢を明示的に指導し、練習させる。
- 聞き手の理解を促す方略を明示的に指導すれば、より自信をもって発表できるようになるだろう。
  - ・発表のモデルを提示して、どのような話し方をするとより伝わりやすいかに気付かせる。
  - ・必要かつ自然なジェスチャーやアイコンタクト、話すスピードが意思伝達において重要な役割を果たすことを指導する。

## 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回スピーチテスト（11月実施：受験者数15）

テスト内容：“My Plan after Graduation”をテーマとした発表

評価方法：以下のループリックによる評価（第1回と同じループリックを使用）

	発音			声		態度
	語の発音	音の連結	強勢	大きさ	速さ	
A	8人 (53.3%)	7人 (46.7%)	10人 (66.7%)	11人 (73.3%)	11人 (73.3%)	11人 (73.3%)
B	7人 (46.7%)	7人 (46.7%)	4人 (26.7%)	4人 (26.7%)	4人 (26.7%)	4人 (26.7%)
C	0人 (0.0%)	1人 (6.7%)	1人 (6.7%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)

統計による比較（Wilcoxonの符号付順位検定）：

	発音			声		態度
	語の発音	音の連結	強勢	大きさ	速さ	
第1回	1.7	1.7	1.5	1.9	2.3	2.1
第2回	2.53	2.4	2.73	2.73	2.73	2.73
p値	0.00	0.02	0.00	0.00	0.04	0.00

※第1回と第2回の各観点を3点満点に換算した際の平均値を算出して表に載せている。

### <分析と考察>

「発音」の各観点においてB以上の評価の生徒の割合が90%を超えていた。また、「声」と「態度」の各観点においてもA評価が73.3%となり、それぞれ改善の目安を達成することができた。さらに、各観点の評価データを検定にかけたところ（Wilcoxonの符号付順位検定）、全ての観点において有意な差が認められた（ $p < 0.05$ ）。

「発音」の観点に関しては、語尾に母音をつけてしまうといった日本語話者特有の癖もほとんど見られず、音のつながりもスムーズにできており、文の中での強勢にも気を付けながらリズム感のある

英語らしいスピーチができていた。「声」と「態度」に関しても、第1回のテスト時よりも堂々と大きな声でアイコンタクトをしつつ、身振りも加えながら自信をもって発表できていた。生徒の相互評価でもこれらについて A または B の評価をしていた。生徒の評価用紙のメモ欄には、発表者が話した内容がしっかりと記されており、聞き手の生徒たちに発表者の話した内容が伝わっていたようだった。

・第2回アンケート（12月実施：回答者数15）

1. あなたは英語の学習が好きですか。

好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い
10人 (66.7%)	5人 (33.3%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)

2. あなたは英語が得意だと思いますか。

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
2人 (13.3%)	9人 (60.0%)	2人 (13.3%)	2人 (13.3%)

<分析と考察>

1の質問について、回答にほとんど変化が見られなかった。2の質問については「得意」「どちらかといえば得意」と回答した生徒数は、第1回の8人(53.3%)から11人(73.3%)に増えたが、改善の目安とした8割には届かなかった。このアンケートでもまだ「発音が不安である」とコメント欄に書いている生徒がおり、自信をもてるようになるためには、今後も継続的な指導が必要だと感じた。

**教師の変化**

この取組の中で、生徒たちのもつ課題を漠然と「発表が苦手」とするのではなく、「発音」「声」「態度」のようにより高い解像度で具体的に把握することで、それらに対する手立ても連動して具体的になっていった。そのことが、生徒たちの課題の解決に一定の効果をもつことを実感することができた。

**今後の課題（次の改善点など）**

筆者からすると生徒の成長は見られていたが、それでもまだ生徒自身が英語での発表について、特に発音に関して十分に自信をもてていない、ということが課題として残った。発音に関する指導を継続して行くとともに、生徒自身が成長を感じることができるような仕組みを模索していきたい。

**まとめ・感想**

目的と手段をしっかりと結びつけて授業を組み立てていくことの重要性を再認識できた研修だった。これからも生徒にとって効果的な英語学習の場としての英語授業を考えていきたい。

**授業改善にあたって参考にした資料等**

佐野正之(編著). (2000). 『アクション・リサーチのすすめ』 大修館書店.

## 身近な事柄について分かりやすく伝えるスピーキング指導

科目名	英語コミュニケーション I	学年	1	形態	HR・ <span style="border: 1px solid black;">習熟度</span> ・小集団
-----	---------------	----	---	----	--

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は11クラス275名（男子158名、女子117名）の1学年全員である。真面目でおとなしい生徒が多く、授業での活動に真摯に取り組むが、基礎的な語彙や文法知識が身に付いておらず、英語に苦手意識をもっている生徒も少なくない。例年、大半の生徒が4年制大学への進学を希望する。

### 解決すべき課題

人前で失敗したくないという思いが強く、発問に対して消極的で自分の意見を言える生徒が少ない。スピーキング活動において使用できる語彙や表現が少なく、言いたいことをなかなか伝えられず、単語のみの発話にとどまったり、正しい語順で文を組み立てられない生徒が多く見受けられる。授業を通して間違いを恐れず、英語を積極的に話す姿勢と、伝えたいことを相手に正確に伝えられる英語力を養いたい。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回アンケート（4月実施：回答者数218）

授業でどのような知識や力を伸ばしたいか。（複数回答可）

聞く力	読む力	書く力	話す力	単語・熟語	文法
130人(59.6%)	113人(51.8%)	97人(44.5%)	152人(69.7%)	76人(34.9%)	82人(37.6%)

- ・第1回スピーキングテスト（6月実施：受験者数275）

音読テスト：教科書や速読練習教材で扱った100語程度の英文を音読する

描写テスト：英検準2級二次試験問題で扱われるイラストに描かれた人物の状況を描写する

評価方法：それぞれ自作ルーブリックによる評価

	音読テスト	描写テスト
A	聞き手が理解しやすい声量・速度・適切な発音で話し、さらに音の強弱、音声変化や意味のまとまりで息継ぎをするなどの聞き手の理解を促す工夫が見られる。	グローバルエラー(S+V 構造の欠如等)がほとんどなく、様々な語彙や表現方法を使いイラストの描写が分かりやすくできている。
B	聞き手が理解できる声量・速度・適切な発音で話している。	グローバルエラー(S+V 構造の欠如等)が多少あり、語彙や表現方法も限定的ではあるが、イラストの描写ができている。
C	声量や速度、発音の正確さが十分でない。	グローバルエラー(S+V 構造の欠如等)が多く、語彙や表現方法が乏しいため、イラストの描写が伝わりにくい。

結果：

	音読テスト	描写テスト
A	27人(9.8%)	4人(1.5%)
B	240人(87.3%)	145人(52.7%)
C	8人(2.9%)	126人(45.8%)

#### <分析と考察>

アンケートの結果から、「話す力」を身に付けたいと答えた生徒が最も多く、特に身近な事柄について話せるようになりたいと考えていることが分かった。また、「発音が難しい」「もっと英語っぽく話せるようになりたい」など発音や強勢、流暢さに関するコメントも多く、次に「文章を組み立て話すことが難しい」などの基本的な文構造に関わるコメントが多く寄せられていた。

音読テストでは87.3%の生徒がB評価となった。この生徒たちは与えられた文章を音読することはできたものの、A評価(9.8%)の生徒たちと比べて不正確な発音や不自然な区切り方が少なからずあり、特に抑揚や強弱のないフラットな読み方が多く見受けられた。また、描写テストでは45.8%の生徒が単語のみの発話や言葉に詰まりイラストの描写が十分にできず、C評価となった。

以上のことから、相手に分かりやすく伝えられるようになるための、適切な発音、語彙や文の強勢などの音声に関する指導と、言いたいことを単語ではなく文単位で英語に変換する力を養う指導が必要であると考えた。

### リサーチ・クエスチョン

生徒が身近な事柄に関して聞き手に分かりやすく伝えられるようになるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：・音読テストの評価でAになる生徒が全体の3割以上になる。

・描写テストの評価でB以上になる生徒が全体の7割以上になる。

### 改善のための手立て

- スピーキングの機会を増やせば、英語での発話に慣れ、身近な事柄に関して聞き手に伝わりやすい英語を話せるようになるだろう。
  - ・帯活動として、Think in 3s や picture description、word guessing など、身近な事柄について説明したり話したりする活動を行う。
  - ・読んで理解した内容を分かりやすく伝えるリテリングを行う。
  - ・読んで理解した内容や関連する事柄について口頭でのQ&Aを行う。
  - ・発話の際に、SVや時制などのグローバルエラーに注意させる。
  
- 明示的な音声指導を行い、継続的に練習をすれば、聞き手に伝わりやすい英語を話せるようになるだろう。
  - ・発音や強勢(アクセント)、強弱(リズム)や音の変化、語のまとまり(チャンク)に注意しながら



ら教科書本文の音読練習を行う。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・第2回アンケート（12月実施：回答者数 245）

授業を通して英語を話す力が伸びたと感じますか。

そう思う	どちらかといえば そう思う	どちらかといえば そう思わない	そう思わない
45人(18.4%)	149人(60.8%)	43人(17.6%)	8人(3.3%)

#### <分析と考察>

約8割の生徒が授業を通して英語を話す力が伸びたと感じており、自由記述では「強弱や話すスピードを意識して英語を話すようになった」「今後は発音をさらに気をつけて音読などを行う」など発音に対する意識の変化が見られた。本文の発音や文の強勢、音の変化を示しながら行った音読練習が生徒の意識変化の一助となったことが考えられる。また、「単語をあてるやつが楽しかったし説明がうまくなった」や「教科書の内容を自分の言葉で話す活動が役に立った」など帯活動やリテリング活動、口頭でのQ&Aに対する肯定的なコメントが多く見られた。一方で、「ペアで会話する時間がもっとあったらいいと思う」「教科書のことではなく日常的なことのQ&Aがあるといい」など会話ややり取りの必要性を訴える生徒も散見された。

- ・第2回スピーキングテスト（12月実施：受験者数 268）\*内容・評価方法は第1回と同様

結果：

	音読テスト	描写テスト
A	77人(28.7%)	92人(34.3%)
B	186人(69.4%)	169人(63.1%)
C	5人(1.9%)	7人(2.6%)

#### <分析と考察>

第1回目のテストと比較すると両方のスピーキングテストでA評価の生徒の割合が増加した。第1回・第2回のデータが揃っている267名分について検定（Wilcoxonの符号付順位検定）を行ったところ、両方のテストで統計学的に有意な向上が認められた（ともに  $p=0.00<0.05$ ）。

音読テストではA評価の生徒が28.7%にとどまり改善の目安にはわずかに到達しなかったが、抑揚や強弱のないフラットな読み方をする生徒は大幅に減った。一方で語彙の発音が適切でない部分や強勢の位置が異なるなどの理由でA評価に届かなかった生徒も多かった。

描写テストではB評価以上になる生徒が全体の9割を超え、改善の目安とした数値目標を達成した。単語のみの発話や言葉に詰まる生徒が圧倒的に少なくなり、知っている語彙、表現を使って文を組み立て、イラストに描かれた人物の状況を説明できていた。word guessingなどの帯活動やリテリング、口頭でのQ&Aなど授業でのスピーキング機会を増やし、文単位での発話を繰り返したことが影響したと考えられる。63.1%の生徒がB評価であり、まだまだ語彙や表現が限定的で文法的なミス

もあるため、発信語彙の増加や文単位の作文能力の向上、そしてそれらを活用して言いたいことを正確に伝える練習が今後も必要であると考えられる。

## **教師の変化**

今回のアクション・リサーチは1学年の生徒全員を対象とし、手立てを共有して実践したため、同じ科目を担当する3名の同僚教員の協力がなければ成り立たなかった。年間目標を元に、各単元のねらいやゴールタスクを設定し、指導と評価を一体化させる上で、同僚教員との連携は欠かせない。年間を通して、お互いに授業内の活動や内容、生徒の反応を共有しながら実践と改善を繰り返し、1人ではなくチームとして授業改善に取り組めたことは、今後の財産になると感じている。

## **今後の課題（次の改善点など）**

今回のアクション・リサーチでは音読テストと描写テストを実施し、音声面と文構造面のそれぞれの変化が確認できた。しかしながら、会話などで聞き手に分かりやすく伝えられるように英語を話すためには両方の技能が同時に求められる。知っている語彙や表現を増やし、それらを使って文を組み立て、音声面を意識しながら発話することを今後も繰り返し練習し、流暢さの向上につなげていきたい。そのためにも今後は「やり取り」の活動をもう少し積極的に採用し、伝えたいことをその場で英語に変換する機会を増やしていきたいと考える。

また、音声指導において教科書本文全てを扱うのではなく、特に間違いやすい発音や語の強勢、音声変化を抜粋することや一文をピックアップして内容語と機能語から文の強勢やリズムを確認するなど重点的に指導したい部分を絞りメリハリをつけた指導が必要であると感じた。

## **まとめ・感想**

同僚の教員と協力して学習到達目標と評価方法、それに向けた授業での指導を共有し、実践できた1年間であった。今回アクション・リサーチを行い生徒の現状やニーズを把握できたことで、より生徒の目線に立って授業を計画することができるようになったと感じる。指導と評価の一体化を図るためにも、周りを巻き込んだ授業実践を今後も続けていき、生徒の目線に立つことを忘れずに、どのような言語活動や支援が効果的なのか模索しながら、目の前の生徒に適した指導を実践していきたい。

また、生徒にとって一番身近な英語話者として教員がモデルとなることから、自身も英語学習者として自己研鑽を続け、学び続けることを大切にしたい。

最後に今回の研究に協力していただいた生徒、同僚の先生方、今回の研修を共にし、新たな学びや刺激を与えてくれた先生方、そして講師の皆様に感謝したい。

## **授業改善にあたって参考にした資料等**

Harmer, J. (2015). *The practice of English language teaching* (5th ed). Harlow, England: Pearson Education.

## 読み手を意識した英文を書くためのライティング指導

科目名	論理・表現 I	学年	1	形態	HR・習熟度・小集団
-----	---------	----	---	----	------------

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は3クラス120名（男子60名、女子60名）の生徒である。1人1台端末を購入しており、授業内外でICTを活用している。多くの生徒が4年制大学への進学を希望しており、宿題や小テストに向けた勉強など、自宅学習の習慣が身に付いている。また授業内でのペアワークやグループワークに積極的に参加する。部活動に参加している生徒も多く、日々の宿題や小テストへの準備などに追われ、教員から与えられる課題以外に進んで学習に取り組む生徒は一部であると思われる。

### 解決すべき課題

高校入試を含めて、これまで短い英文のライティング問題に向けた学習は数多くこなしてきたようだが、パラグラフライティングなどまとまった量を書く練習はほとんど積んできていないようだ。入学直後の授業内で自己紹介文を書かせたが、事実の羅列をただで読み手が意識されておらず、情報が整理されていない英文が数多く見られた。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・英語学習に関するアンケート（4月実施：回答者115）

1. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか。1～3個選んでください。

英語を聞く力	英語を読む力	英語を書く力	英語を話す力	単語や熟語の知識	文法の知識
57人 (49.6%)	40人 (34.8%)	36人 (31.3%)	92人 (80.0%)	44人 (38.3%)	40人 (34.8%)

2. 英語で伝える力（書く力）はこれからの生活のなかで必要だと思いますか。

そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
72人 (62.6%)	6人 (5.2%)	37人 (32.2%)	0人 (0.0%)

#### <分析と考察>

英語で書く力を伸ばしたいと答えた生徒は3割程度だったが、およそ7割の生徒は書く力がこれからの生活のなかで必要だと回答した。英作文の難しさから苦手意識をもっているのではないかと推察され、本校の生徒に求められる書く力の伸長のためには、指導の工夫が求められると感じた。

- ・前期ライティングテスト（6月実施：受験者数120）※論理・表現 I の定期試験後半20分間で実施  
内容：あなたはアメリカに留学中で、地域の高校生のクラブに参加しようと考えています。参加す

るつもりクラブを1つ選び、彼らのSNSに50語～70語で自己紹介を投稿してください。  
(クラブの選択肢を提示したが、ここでは省略する)。

評価方法：自作ルーブリック（試験の1週間前までに提示）

評価	観点①知識・技能（文法）	観点②思考・判断・表現（内容）
5	4に加えて、豊かな表現の使用が見られる。	4に加えて、内容や構成に工夫が見られる。
4 (評価規準)	主語＋動詞の欠如や、内容の理解に支障がある文法的な誤りが全くない。	目的・場面に応じて、読み手を意識した英文を書いている。
3	主語＋動詞の欠如や、内容の理解に支障がある文法的な誤りがほとんどない。	目的・場面に応じて、英文を書いている。
2	主語＋動詞の欠如や、内容の理解に支障がある文法的な誤りがいくつかある。	目的・場面に応じた英文を書いていない。
1	未受験、解答なし	未受験、解答なし

・評価「5」については、科目担当者全員で協議の上、評価を与える。

結果：【観点①知識・技能】 評価4以上の生徒：114人（95.0%）

評価	5	4	3	2	1
人数	3人（2.5%）	111人（92.5%）	6人（5.0%）	0人（0.0%）	0人（0.0%）

【観点②思考・判断・表現】 評価4以上の生徒：91人（75.3%）

評価	5	4	3	2	1
人数	5人（4.2%）	86人（71.7%）	24人（20%）	5人（4.2%）	0人（0.0%）

### <分析と考察>

知識・技能においては95.0%の生徒が評価4以上を与えられている。思考・判断・表現の観点において、自己紹介文にはなっているが、これまでの経験にしか触れていなかったり、参加したい意思を述べていなかったりした生徒は、読み手を意識していないと捉えて評価3とした。また、情報が整理されておらず、内容を読み取りづらい文章についても評価3とした。今後、さらに論理的な文章を書けるようになっていくために、内容とともに論理展開にも着目して文章を作るよう指導していく必要があるだろう。

## リサーチ・クエスチョン

生徒が読み手を意識して、自分の考えを論理的に書くことができるようになるには、どのような指導をすればよいか。

改善の目安：11月実施のライティングテストで、知識・技能と思考・判断・表現の各観点の評価が4以上になる生徒が全体の8割以上になる。

## 改善のための手立て

○ peer check を行えば、相手に伝えようとする意識が高まり、より読み手を意識した文章を書けるようになるだろう。

・生徒同士で書いた文章を添削し合う。またルーブリックを同時に示し、文法面と内容面についてコ

メントを添えて評価をする。また、作文した生徒と評価者はいずれも匿名にすることで、誤りを指摘するハードルを下げる。

○ input の工夫をすれば、文章の構成や表現の幅が広くなり、より豊かで論理的な文章を書けるようになるだろう。

- ・教科書や自作の英文パラグラフを読む時に、構成にも着目させる。
- ・改善を要する文章を分析させることにより、内容面だけでなく論理展開に意識を向けさせる。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・後期ライティングテスト（11月実施：受験者数 118）※論理・表現 I の定期試験後半 20 分間で実施  
内容：あなたはインターナショナルスクール（高等部）に通う生徒です。以下の校長先生からの質問に 70 語～90 語で返事をしてください。

“In our school, students are not allowed to bring their cellphones or smartphones. What do you think about this rule?”

評価方法：自作ループリック（試験の 1 週間前までに提示）

評価	観点①知識・技能（文法）	観点②思考・判断・表現（内容）
5	4に加えて、豊かな表現の使用が見られる	4に加えて、内容や構成に工夫が見られる。
4 (評価規準)	主語＋動詞の欠如、文と文をつなぐ語句の使い方の誤り、内容の理解に支障がある文法的な誤りが全くない。	目的・場面に応じて、読み手を意識した英文を書いている。また、自分の考えを述べる文とそれを支える文の両方が書かれており、内容につながりがある。
3	主語＋動詞の欠如、文と文をつなぐ語句の使い方の誤り、内容の理解に支障がある文法的な誤りがほとんどない。	目的・場面に応じて、英文を書いている。自分の考えを述べる文とそれを支える文の両方が書かれている。
2	主語＋動詞の欠如、文と文をつなぐ語句の使い方の誤り、内容の理解に支障がある文法的な誤りがいくつかある。	目的・場面に応じた英文を書いていない。
1	未受験、解答なし	未受験、解答なし

・評価「5」については、科目担当者全員で協議の上、評価を与える。

結果：【観点①知識・技能】評価 4 以上の生徒：51 人（43.2%）

評価	5	4	3	2	1
人数	4 人 (3.4%)	47 人 (39.8%)	54 人 (45.8%)	13 人 (11.0%)	0 人 (0.0%)

【観点②思考・判断・表現】評価 4 以上の生徒：77 人（65.3%）

評価	5	4	3	2	1
人数	12 人 (10.2%)	65 人 (55.1%)	36 人 (30.5%)	5 人 (4.2%)	0 人 (0.0%)

#### <分析と考察>

知識・技能において評価 4 以上になった生徒は 43.2%で、前期と比べて大幅に下がり、改善の目安を達成することができなかった。これは、ターゲットとなった文法事項である接続詞の使い方や例示の表現が、定着にまで至らなかったのが原因である。また、思考・判断・表現の観点においても、評価 4 以上になる生徒は 65.3%と、改善の目安とした 8 割以上には至らなかった。これは、後

期のテストが前期の自己紹介文に比べて内容的にも語数的にも発展的であり、より論理的な思考が要求されたためと考える。主題文と支持文のつながりが薄かったり、学校生活とは関係が薄い内容を書いたりしている生徒が散見され、文章全体の一貫性が欠けていることも多かった。

授業内の peer check で、文法面と内容面について評価させる活動を行った結果、テスト後の振り返りシートには、「peer check を行うことで、内容に気を配れるようになった」「過去形など単純なミスを指摘されて、書き終わったら読み返すようになった」という記述があり、内容の精選や正確さの向上については多少効果があったようである。しかし、論理展開の向上への効果はあまりみられなかった。より効果的に peer check を行う際には、評価のポイントを事前に共有するなどの工夫が必要であったと感じる。

## **教師の変化**

これまで、資格試験や大学入試で求められる「短時間で英文を書く力」の育成に注力してきたつもりであったが、この研究を通じて、書く力を育てるためには論理展開についての指導が不可欠であることに気づき、意識的に心がけるようになった。

## **今後の課題（次の改善点など）**

英作文に含めるべき内容については peer check の効果があったと考えているが、論理展開が整った文章を書けるようになるには、さらに別の手立てが必要だと痛感した。知識・技能の面においても、教員側が想定していたよりも理解が定着していなかったことが分かった。明示的な指導によって文法知識の正しい使い方の定着を図りたい。

## **まとめ・感想**

毎回の定期テストでパラグラフィティングをさせてきたが、生徒の作文を見るたびに新たな課題が浮き彫りになってきた。今回のアクション・リサーチでは論理展開を意識させる指導について研究をすすめてきたが、ただお互いの英作文を読みあう活動だけでは十分な効果があったとはいえ、前もって文章を分析させたり、評価の視点について事前に共有してからの活動が効果的だったと考える。引き続き、peer check を含め、論理的な英文を書けるようになるための様々な工夫を実践していきたい。

## **授業改善にあたって参考にした資料等**

大井恭子・上村妙子・佐野キムマリー(編著).(2011).『ライティングパワー (Revised Edition)』研究社.  
菅正隆・松下信之(編著).(2022).『ペーパーテスト&パフォーマンステスト例が満載！高等学校外国語新3観点の学習評価完全ガイドブック』明治図書出版.  
樋口忠彦・高橋一幸・泉恵美子・加賀田哲也・久保野雅史(編著).(2019).『Q&A 高校英語指導法辞典—現場の悩み133に答える—』教育出版.

## 英語学習初期段階のためのライティング指導

科目名	コミュニケーション英語Ⅱ	学年	3・4	形態	HR・習熟度・ <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">小集団</span>
-----	--------------	----	-----	----	---

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は定時制課程の3・4年次27名（男子16名、女子11名）である。生徒はコミュニケーション英語Ⅰを1・2年次の2年間で分割履修した後、コミュニケーション英語Ⅱを自ら選択して履修している。生徒の中には基礎からの学習を希望する生徒もあり、集団内の習熟度には差がある。例年の進路実態は、就職と進学がそれぞれ半分程で、一般入試を利用した進学をする生徒は少ない。コミュニケーションが苦手な生徒が多く、様々な学習支援を行っている。

### 解決すべき課題

英語のみならず日本語であっても、自分のことについて書いたり話したりして表現をする活動自体に慣れている生徒が少ない。スモールステップによるライティングの指導を通して、生徒が英語の基礎的な知識・技能に加えて、自分の意見を伝える力を身に付けさせたい。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・第1回アンケート（4月実施：回答者数26）

英語の学習が好きですか。

好き	どちらかというが好き	どちらかという嫌い	嫌い
7人 (26.9%)	9人 (34.6%)	8人 (30.8%)	2人 (7.7%)

英語が得意ですか。

得意	どちらかという得意	どちらかという苦手	苦手
1人 (3.8%)	6人 (23.1%)	7人 (26.9%)	12人 (46.2%)

ペアワークは好きですか。

好き	どちらかというが好き	どちらかという嫌い	嫌い
3人 (11.5%)	7人 (28.9%)	14人 (53.8%)	2人 (7.7%)

グループワークは好きですか。

好き	どちらかというが好き	どちらかという嫌い	嫌い
3人 (11.5%)	7人 (26.9%)	14人 (53.8%)	2人 (7.7%)

- ・第1回ライティングテスト（4月実施：受験者数26、20分間）

テスト内容：英検3級ライティングテスト（トピック：週末は何をするか。）

評価方法：以下のルーブリックによる評価

	分量	内容	正確さ
A	「主語＋動詞」がある文が7文以上書かれている。	内容に一貫性があり、具体例・理由などによって深められている。	内容伝達に支障をきたす誤りが無い。
B	「主語＋動詞」がある文が4文～6文書かれている。	内容に一貫性がある。	内容伝達に支障をきたす誤りが1つしかない。
C	「主語＋動詞」がある文が3文以下である。	内容に一貫性がない。	内容伝達に支障をきたす誤りが2つ以上ある。

結果：

	分量	内容	正確さ
A	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)	1人 (3.8%)
B	8人 (30.8%)	3人 (11.5%)	0人 (0.0%)
C	18人 (69.2%)	23人 (88.5%)	25人 (96.2%)
B以上	8人 (30.8%)	3人 (11.5%)	1人 (3.8%)

#### <分析と考察>

英語学習に関するアンケートでは、6割以上の生徒が英語の学習が「(どちらかというと)好き」と回答した。一方で英語が「(どちらかというと)苦手」と答える生徒が7割、ペアワークやグループワークが「(どちらかというと)嫌い」と回答する生徒の割合が6割を超えていた。第1回のライティングテストの結果では、7割程度の生徒の書く分量が3文程度にとどまっており、9割程度の生徒の書いた内容に一貫性がなかった。英文を分析すると、基本的なS+V構造はあるものの、名詞や動詞の使い方に誤りが多く見られた。また、使用語彙が少なく、正しい綴りの単語が半分もない解答が多かった。そこで、ライティングの継続的な練習を通じて、生徒が基本的な英語表現を習得すること、また、身近な話題について自分の考えや気持ちを伝える練習を積んでいくことにより、生徒が英語学習に対する達成感や前向きな気持ちの変化を得られるだろうと考えた。

#### リサーチ・クエスチョン

生徒が前向きにライティング活動に取り組み、身近な話題について自分の考えや気持ちを豊かな内容と一貫性のある英文で書けるようになるにはどのような指導をすればよいか。

- 改善の目安：
- ・ライティングテストでそれぞれの観点でB評価以上になる生徒が7割以上になる。
  - ・ライティングへの前向きな気持ちの変化を感じる生徒が7割以上になる。

#### 改善のための手立て

- コミュニカティブなライティング活動を行えば、より前向きに英語を書く意識が高まるだろう。
  - ・ ペアワークを通じて、ライティングトピックに対するアイディアの創出を行う。
  - ・ ペアワークで代名詞や文全体のつながりに意識を持たせる練習を行う。
  - ・ 生徒の書いた作品をクラス全体で共有し、書いた内容に対して感想や意見を書かせる。



- 5W1H を意識して書く練習を継続的にさせれば、生徒は自己表現に慣れ、より豊かな内容の英文を書けるようになるだろう。
  - ・ライティングテストと同じ形式のライティング練習を繰り返し行う。
  - ・様々なグラフィックオーガナイザーを用いて書く内容を整理させ、一貫性のある英文を書かせる。
- スピーキング活動を繰り返し行えば、基本的な文構造や基礎的な語彙力が身に付き、より正確な英文が書けるようになるだろう。
  - ・身近な話題をテーマとした会話練習を行い、基礎的な英語表現や語彙を使用する機会を増やす。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・テスト形式でのライティング練習①～⑨（4月～12月実施、各回20分間）

第2回ライティングテストまでに、第1回テストと同じ難易度で9回の練習を行った。結果は、ループリック内項目の「分量」「内容」「正確さ」においてB評価以上を得た生徒の割合である。

結果：

	練習①	練習②	練習③	練習④	練習⑤	練習⑥	練習⑦	練習⑧	練習⑨
分量	66.7%	66.7%	77.8%	75.0%	31.3%	26.1%	50.0%	88.2%	87.5%
内容	75.0%	72.2%	88.9%	93.8%	93.8%	60.9%	83.3%	94.1%	100%
正確さ	45.8%	61.1%	61.1%	68.8%	68.8%	30.4%	58.3%	70.6%	75.0%
受験者数	24人	18人	18人	16人	16人	23人	12人	17人	16人

- ・第2回ライティングテスト（12月実施：受験者数12、20分間）

テスト内容：英検3級ライティングテスト（トピック：冬休みに何をしたいか。）

評価方法：自作ループリックによる評価（第1回と同じループリックを使用）

結果：

	分量		内容		正確さ	
	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回
A	0人 (0.0%)	5人 (41.7%)	0人 (0.0%)	8人 (66.7%)	1人 (3.8%)	2人 (16.7%)
B	8人 (30.7%)	6人 (50.0%)	3人 (11.5%)	3人 (25.0%)	0人 (0.0%)	1人 (8.3%)
C	18人 (69.2%)	1人 (8.3%)	23人 (88.4%)	1人 (8.3%)	25人 (96.1%)	9人 (75.0%)
B以上	8人 (30.7%)	11人 (91.7%)	3人 (11.5%)	11人 (91.7%)	1人 (3.8%)	3人 (25.0%)

- ・第2回アンケート（12月実施：回答者数14）＊複数回答可

ライティングへの気持ちの変化はありましたか。

ライティングへの前向きな 気持ちの変化があった	ライティングへの前向きではない 気持ちの変化があった	ライティングへの 気持ちの変化がなかった
7人 (50.0%)	4人 (28.6%)	7人 (50.0%)

## <分析と考察>

テスト形式の9回のライティング練習では、各回の受験者数にばらつきがあった。練習⑤⑥⑦ではトピックが少し社会的な内容であったことが影響して評価の低下が見られるが、概して徐々に評価が向上する結果となった。第2回のライティングテストでは、「分量」「内容」の観点でB評価以上の生徒の割合が7割以上となり、改善の目安を達成して、有意な向上も認められた（Wilcoxon の符号付順位検定、 $p=0.00<0.05$ ）。グラフィックオーガナイザーを用いた思考の視覚化が「内容」に効果をもたらしたと考える。「正確さ」はB評価以上が25.0%となり、改善の目安を達成することはできず、基礎的な英語表現の定着に課題を残した。第2回のアンケートでは、「ライティングに対して前向きな気持ちの変化があった」と回答した生徒の割合は5割にとどまった。生徒の回答には、「自分のことを書くことが嫌ではなくなった」「以前と比べて英語の文章を組み立てることに慣れて、やりやすくなった」というコメントがあった一方で、「作文を書くことに苦手意識がある」「何回やってもニガテ」「むずかしい」というコメントも見られた。引き続き、自己表現に対する苦手意識を解消するための手立てを考え、実践する必要があると感じた。

## **教師の変化**

これまで行ってきた支援は、生徒が書いた文にある誤りを全て指摘することと、そこから指導方針を考えて実践することにとどまっていた。今回の取組を通じて、ライティング活動は、生徒にとって、書く能力が身に付くだけでなく、自律的な学習を促す効果がある省察的な活動であると気付いた。自ら直し書く力を高めていく学習者の育成を目指して、指導法を引き続き研究していきたい。

## **今後の課題（次の改善点など）**

生徒の実情に応じたトピックやルーブリックの設定を行いたい。また、読み手を意識した文の構成、場面に応じた語彙の使用、トピックに対する背景知識を学ばせる活動などに取り組みたい。

## **まとめ・感想**

今年1年の取組を通じて、授業改善は、教師が生徒を深く理解しようとする姿勢が生徒の気持ちとかみ合ってはじめて効果を生むと分かった。教師が生徒の実態に即した学習到達目標を設定し、目標達成に向けた道筋を組み立てること、多様な学習方法を提示すること、成果がなかなか出ない時にサポートすることによって、生徒と教師が互いを尊重し合える関係となることが大切であると感じた。

## **授業改善にあたって参考にした資料等**

小嶋英夫・尾関直子・廣森友人(編集).(2010).『成長する英語学習者 学習者要因と自律学習』大修館書店。

## 説得力があり読み手の興味を引く英文を書かせるための指導

科目名	論理・表現 I	学年	1	形態	HR・習熟度・ <span style="border: 1px solid black;">小集団</span>
-----	---------	----	---	----	---

### クラスの特徴（男女比、雰囲気、進路など）

対象は4クラス105名（男子31名、女子74名）の生徒である。ほとんどの生徒が大学進学を目指し、進路実現に向けて勉強と部活動とを両立しながら学校生活を送る。ここ2～3年は英語資格試験のスコアを大学進学のための資料として活用する生徒が増えている。教員の指示に従い、難しい課題にも前向きに取り組む。生徒同士のペアワークやグループワークなどにも積極的に取り組む。

### 解決すべき課題

話す・聞く能力が高く、更に伸ばそうとする積極的な取組が見受けられる。一方、書く能力に関しては、授業で書かせる機会を十分に与えていないこと、指導が十分でないことが課題であり、書く能力を高めようとする意識を醸成できていない。多くの生徒が受検する英語資格試験でも、自分の意見を文章にする力は不可欠であり、適切な指導が必要である。また、生徒の英文は単調なものが多く、読み手の興味を引くような英文を書かせるための指導が必要である。自分が本当に伝えたいことを、読み手の印象に残るような英文で書くことができるよう指導し、積極的にライティング活動に取り組みせたい。

### 事前の現状把握（アンケート、テストの結果など）

- ・英語学習に関するアンケート調査①（5月実施：回答者数86）

1. あなたは英語が得意だと思いますか、苦手だと思いますか？

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
7人 (8.1%)	45人 (52.3%)	21人 (24.4%)	13人 (15.1%)

2. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか？1～3個選んでください。

聞く力	読む力	書く力	話す力	単語・熟語の知識	文法の知識
53人 (61.6%)	24人 (27.9%)	32人 (37.2%)	66人 (76.7%)	29人 (33.7%)	37人 (43.0%)

#### <分析と考察>

英語が「得意」、「どちらかといえば得意」と感じている生徒は全体の6割を超えた。この授業で伸ばしたい力として「書く力」を挙げた生徒は4割に届かなかった。英語資格試験や大学入試で自分の意見を文章にする力は不可欠であるにもかかわらず、書く能力を高めようとする意識は高くない。

・第1回ライティングテスト（7月実施：受験者数96）

「都会と田舎のどちらに住みたいか」という質問に、理由を含めて自分の意見を60～80語で述べるテストを実施した。制限時間は20分間とし、以下のルーブリックで評価を行った。

	Content	Structure	Accuracy
3点	自分の意見や理由を自分の経験や具体例を含めて述べている。語彙・表現は内容に合う適切なものである。	序論・本論・結論の構成が明確で、自分の主張が伝わりやすい文章である。	文法・語法についての、内容伝達に関わる誤りがない。
2点	自分の意見や理由を述べているが、一般的な考えを述べている。語彙・表現は内容に合うものである。	序論・本論・結論の構成に基づき、自分の主張が伝わる文章である。	文法・語法についての、内容伝達に関わる誤りがわずかに見られる。
1点	自分の意見は述べているが理由や説明がなく、内容に不足がある。語彙・表現は内容に関連しないものがある。	序論・本論・結論の構成がなく、自分の主張が分かりにくい。	文法・語法についての、内容伝達に関わる誤りが目立つ。

結果：

	Content	Structure	Accuracy
3点	80人 (83.3%)	52人 (54.2%)	27人 (28.1%)
2点	14人 (14.6%)	44人 (45.8%)	69人 (71.9%)
1点	2人 (2.1%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)

<分析と考察>

Content が3点の生徒が全体の8割を超えた。一方、Structure が3点の生徒は5割程度、Accuracy が3点の生徒は3割に届かず改善が必要である。Structure が2点の生徒の英文には結論が明確でないものがあつた。7割以上の生徒の英文には内容伝達に関わる誤りが見られた（Accuracy が2点）。

**リサーチ・クエスチョン**

身近な話題について、様々な表現や文構造を使って、説得力があり読み手の興味を引く意見文を書く力を身に付けさせるにはどのような指導をすればよいか。

改善の目安：第2回ライティングテストで Content が3点の生徒が全体の9割以上、Structure が3点の生徒が全体の8割以上、Accuracy が3点の生徒が全体の8割以上になる。

**改善のための手立て**

- モデル文を使って内容・構成についての分析を行えばライティングの質が高まり、単調でなく読み手の興味を引く英文が書けるようになるだろう。
  - ・複数のモデル文を使い、ルーブリックの評価基準についてクラス全体で確認する。

- ・ループリックを使用し、生徒同士が共通の視点をもって自己評価や相互評価を行う。
- 様々なつなぎ表現や文構造を指導すれば、より豊かで読み手に伝わりやすい正確な英文が書けるようになるだろう。
- ・文構造を工夫して自分の伝えたい部分を強調する方法などについて、モデル文を示して指導する。
  - ・サンプル文を使って、良く見られる文の誤りについてクラス全体で確認する。
- 他者との意見交換をライティングの前に行えば、より具体的で説得力のある意見文を書けるようになるだろう。
- ・自分の意見に対する反対意見を考え、その考えを踏まえて自分の意見を述べる。
  - ・与えられた立場でディベートを行い、様々な考えに触れ視野を広げることができるよう指導する。

### 生徒の変化（途中経過、事後の検証結果など）

- ・英語学習に関するアンケート調査②（12月実施：回答者数 98）

1. あなたは英語が得意だと思いますか、苦手だと思いますか？

得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手
0人 (0.0%)	40人 (40.8%)	30人 (30.6%)	28人 (28.6%)

2. この授業でどのような知識や力を伸ばしたいと思いますか？ 1～3個選んでください。

聞く力	読む力	書く力	話す力	単語・熟語の知識	文法の知識
35人 (35.7%)	45人 (45.9%)	50人 (51.0%)	55人 (56.1%)	39人 (39.8%)	48人 (49.0%)

#### <分析と考察>

英語が「得意」、「どちらかといえば得意」と感じている生徒は全体の 40.8%で、5月の 60.5%より低下した。この授業では全ての単元でライティング課題に取り組みさせたことから、思考力・判断力・表現力を要求する英語での表現活動に少し疲れてしまい、英語に苦手意識を持った生徒が一定数いたことが考えられる。また、部活動が忙しく、学習とのバランスに苦労しているという生徒の声があった。学習に対するモチベーション維持のため、生徒の取組へのこまめなフィードバックが必要である。この授業で伸ばしたい力として「書く力」を挙げた生徒は約5割で、「話す力」に次いで2位となった。生徒たちのライティングに対する意識が変わったようだ。

- ・第2回ライティングテスト（12月実施：受験者数 96）

「テレビと YouTube のどちらを視聴するのが好きか」という質問に答える。内容、語数、時間、使用したループリックは第1回ライティングテストと同様である。

結果：

	Content		Structure		Accuracy	
	第1回	第2回	第1回	第2回	第1回	第2回
3点	80人 (80.3%)	94人 (97.9%)	52人 (54.2%)	84人 (87.5%)	27人 (28.1%)	24人 (25.0%)
2点	14人 (14.6%)	2人 (2.1%)	44人 (45.8%)	12人 (12.5%)	69人 (71.9%)	72人 (75.0%)
1点	2人 (2.1%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)

## <分析と考察>

Content が3点の生徒は9割、Structure が3点の生徒は8割を超え、改善の目安を達成した。それぞれの比較データを検定 (Wilcoxon の符号付順位検定) にかけたところ、統計学的に有意な向上が認められた (いずれも  $p = 0.00 < 0.05$ )。Accuracy が3点の生徒は25.0%で、目安とした8割に届かなかった。多くの生徒の英文に授業で指導した表現や文構造が使用されており、結論まで書くことができていたが、Accuracy にはほとんど改善が見られず、3点から2点へ下がった生徒もあり、手立てが十分でなかった。内容の指導に注力しすぎたことが原因であったと考えられる。

## 教師の変化

- ・教育・英語・教授法などを学び、語り、情報共有しながら、授業改善を実践することで教員の醍醐味の一つを味わい、初心に帰ることができた。
- ・研修や授業で試行錯誤する過程で自分自身も生徒の立場に立ち、生徒の心理を知り、指導に生かすことができた。

## 今後の課題 (次の改善点など)

ルーブリックの各観点の記述を工夫し、より良い英文の在り方について生徒と共通理解を図っていきたい。例えば、自分の経験や具体例を挙げた英文についても、表現が異なれば説得力にも違いが生まれる。そのような違いをルーブリックに記述することで、どんな英文を書いたらよいかについて具体的に分かりやすく指導し、その上で評価をするようにしていきたい。

## まとめ・感想

様々な業務に追われながら授業をこなす日々の中で十分に授業改善や授業準備に時間を割くことが難しく、授業をアップデートできていないと感じていた。このような研修に参加し、意識的に授業と向き合うことができたことに感謝している。新しい指導の視点を得るだけでなく、自身の指導や生徒の取組状況・成果などを可視化することで新しいものが見えてきた。また、今後は自分自身の英語力の向上にも努めたい。

## 授業改善にあたって参考にした資料等

植田一三. (2005). 『発信型英語スーパーレベルライティング』ベレ出版.

小林良裕. (2018). 『高校生のための初めての英語ディベート』S.A.D. Works.

担当者 (50 音順)

出羽 由紀 (いずは ゆき)  
大石 智子 (おおいし ともこ)  
グエン トアー (NGUYEN, Thoa)  
高取 純子 (たかとり じゅんこ)  
パリセ ピーター (PARISE, Peter)  
福富 正人 (ふくとみ まさと)

運営協力者 (50 音順)

潮来 友梨 (いたこ ゆり)  
ウォーリー ジェイコブ (WHALLEY, Jacob)  
鎌田 淳司 (かまだ じゅんじ)  
ウールソン クレア (WOOLSON, Claire)  
田辺 友耶 (たなべ ゆうや)  
村越 みどり (むらこし みどり)

---

令和4年度 英語教育中核教員育成研修  
授業改善プロジェクト 報告書  
ーアクション・リサーチによる高等学校英語授業での実践研究ー

発行日 令和5年3月1日  
編集 神奈川県立総合教育センター  
(担当) 高取 純子  
発行 神奈川県立総合教育センター  
藤沢市善行7-1-1  
TEL 0466(81)1635

---